様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年５月３１日現在

機関番号：１７４０１
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2010
課題番号：２０６０５００６
研究課題名（和文）　民俗・民具を活用した博物館における回想法・回想ワークの研究

研究課題名（英文）Research of reminiscence therapy and recollection work in museum where folk customs and MINGU were used

研究代表者
岩﨑　竹彦（IWASAKI　TAKEHIKO）
熊本大学・五高記念館・准教授
研究者番号：８０３００４０８

研究成果の概要（和文）：現在、各地の地域博物館で行われている回想法について、博物館の関与の在り方から 3 タイプに分類し、それぞれの長所、短所を明らかにした上で望ましい実践方法を提言した。民具がなぜ高齢者の豊かな回想を引き出しうるのかを展覧会を開催することで広く社会に周知すると共に、民具の文化財価値の啓蒙普及に努めた。また、そうした活動を通して回想法は博物館振興につながることを明らかにした。さらに現代人の記憶から時々の社会・時代を象徴するモノが見えてくることを提言し、歴史博物館の現代史展示及び近現代の生活文化にかかる資料収集に有効な事例を収集した。

研究成果の概要（英文）：After the reminiscence therapy done in a regional museum in various places was classified from what should be of the participation of the museum into three types, and each merit and the weak point were clarified, it proposed a preferable practice method now. Whether MINGU was able to draw out the recollection with a rich senior citizen why enlightenment spread of cultural asset value of MINGU was widely tried by holding the exhibition with well-known in the society though did not know. Moreover, the reminiscence therapy clarified leading to the museum promotion through such an activity. In addition, it proposed that symbolizing an occasional society and the age from the modern people's memories come into view, and an effective cases for the collecting data that hung to a passing history exhibition, modern, of Historical Museum modern life culture were collected.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	1,200,000	360,000	1,560,000
２００９年度	400,000	120,000	520,000
２０１０年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：民俗学　博物館学
科研費の分科・細目：博物館学
キーワード：民俗学、民具学、博物館学、回想法、社会福祉、高齢者福祉、近現代の生活文化資料

１．研究開始当初の背景

（1）回想法はアメリカの老年精神科医ロバート・バトラーが 1963 年に提唱した心理療法であり、以後欧米を中心に研究が進展した。とくに、イギリスの博物館では 1980 年から活動の一環として回想法を取り入れ、高齢者

を対象とした精神ケアの一翼を担ってきた。
わが国では北名古屋市歴史民俗資料館が2001年から回想法事業を展開し、館外貸出用キットを作成するなど、地域博物館における回想法活動の指導的役割を果たしている。
(2) 岩﨑は2002年6月から「民俗文化を用いた回想法・回想ワークの研究」に着手し、翌年7月に「シンポジウム福祉と文化のまちづくり―回想法で輝く、人・時間・空間―」（開催地：岡山県新見市）を開催し、また関係する学術団体（民俗学、民具学、博館学）において、民具を用いた回想法を博物館が取り入れることで博物館振興につながることを提言してきた。
民具を活用した回想法と博物館振興との関係は、
①博物館が社会問題に対峙し、その解決に向けた活動に取り組む様子を広報することで博物館の存在意義が向上する。
②民具は国民生活の推移を理解するうえで欠くことのできない文化財であるにもかかわらず、いわゆる"一品主義（お宝主義）"とは正反対の立場であるため、残念ながらその価値が一般に認識されているとは言い難い。しかし回想法の有効な材料となり得るのは一品（お宝）でなく、だれもが当たり前のように使ってきた道具だからである。そうした価値とチカラを広く社会に周知させることで民具の文化財価値の再認識、引いては民具を大量に収蔵する歴史博物館の存在意義の向上につながること。
の2点である。
こうした大きなメリットがあるにもかかわらず、積極的に実施する館、あるいは継続的な活動につなげる館が増加しないのはデメリットも少なからず生起するからである。したがって、回想法を博物館振興につなげるためにはデメリットを把握し、それを最小限に抑える方法を考える必要があった。
また、博物館が民俗資料を活用して回想法に取り組む場合、収蔵資料の大半は高度経済成長期以前のものであることを考慮しなければならない。戦後の高度経済成長がスタートした神武景気からすでに 50 年以上が経過しており、電化・機械化以前の道具は現代の高齢者にとって必ずしもなじみや懐かしさの対象とはいえなくなっている。とくに都市で生まれ育った高齢者にはその傾向が顕著であろう。したがって、戦後生まれの高齢者がなじみや懐かしさを感じる生活道具の把握が今後の課題であり、そのことは歴史博物館の現代史展示や近現代資料の博物館資料化を考えることにつながり、同時にこれからの文化財保護の在り方を検討するきっかけともなるに違いない。

２．研究の目的
(1) 民俗・民具を活用した回想法を博物館振興につなげること。
(2) 博物館に収蔵されている民俗資料の文化財的価値を広く社会に周知させること。
(3) 地域博物館の現代史展示及び近現代の生活文化に係る諸道具の博物館資料化、とりわけ高度経済成長期及びそれ以降の生活文化道具等の文化財的価値並びに潜在的価値を検討すること。

３．研究の方法
(1) 博物館での聞き取り調査
回想法を実施している博物館の学芸員に面接をし（一部、福祉施設担当者を含む）、実施方法、テーマと材料、どのような回想が得られたのか、館にとってのメリット及びデメリット等に関する聞き取り調査を行った。
(2) 展覧会の開催
①「思い出のチカラ―回想のススメ―」展
【開催場所】熊本大学五高記念館
【開催期間】2008年10月1日～11月24日
【展示構成】
ROOM1「思い出のチカラ」
ROOM2「記憶を展示する」
ROOM3「麦島写真館にみる昭和の思い出」
【開催趣旨】なぜ民具は高齢者の豊かな回想を引き出すことができるのか。それを展覧会によって明らかにすること及び我々の記憶にはどのようなモノが潜んでいるのか、この2点を明らかにすることを目的に本展覧会を開催した。
ROOM1 では、回想法の紹介及び具体的な実践例として熊本市立熊本博物館が行なっている回想法のビデオ上映を行った。
ROOM2 では、我々の記憶の中にあるモノを抽出し展示した。展示に当たり、熊本市立熊本博物館のボランティア団体「博萌会」のメンバー及び勤務校である熊本大学において民俗学を専攻する学生の協力を得て、日常生活の中でふとしたことがきっかけとなって思い出したさまざまな事柄を「私の思い出」としてレポートしてもらった。
通常、博物館で展覧会を企画する場合、まずテーマを設定して、そのテーマにそったプロットを組み立てる。つぎに、展示資料を当てはめながら、ストーリーを作り上げていく。しかし、ここではそうした手順を踏まずに、「私の思い出」の中に現れたモノを出陳してもらおう、あるいは博物館の収蔵庫から探し出して展示しよう、というコンセプトで企画した。コーナー名称「記憶を展示する」の所以である。さらに「私の思い出」を世代別に編集した「思い出シート」を作成し、それを展示解説シートとして活用した。
ROOM3 では、熊本県八代市在住の麦島勝氏が 60 有余年にわたって撮影した写真の中か

ら 80 枚をセレクトし、それらを「子ども」「里・山・海の仕事」「馬」「家」「人生儀礼」「年中行事」「まちかど」の 7 つに分類をして展示した。麦島氏には撮影した当時のことを思い出してもらい、それを「思い出シート」に編集し、展示解説とした。

②「わたしたちの思い出の品」展

【開催場所】熊本大学五高記念館

【開催期間】2009 年 3 月 9 日～16 日

【開催趣旨】我々が一定年齢に達した時、懐かしさを感じる年代は共通しているのではないか。そしてそれは学齢期から成人に達する頃まででではないかという仮定のもとに、阿蘇地域に居住する人々及び熊本大学学芸員課程履修学生の協力を得て、各自が大切にしている思い出の一品を展示することで記憶の中にあるモノを探ろうとした。

本展覧会においてもモノにまつわる思い出を展示解説とした。

③「ちょっと昔のくらし探検」展

【開催場所】熊本大学五高記念館

【開催期間】2011 年 1 月 17 日～2 月 14 日

【展示構成】

第 1 部「台所今昔」
第 2 部「洗濯と裁縫」
第 3 部「もっと暖かく　もっと明るく」
第 4 部「田畑で働く」
第 5 部「山で働く」
第 6 部「海や川で働く」
第 7 部「ものを作る」
第 8 部「運ぶ、はかる」
第 9 部「昔の小学校」

【開催趣旨】本展覧会は小学 3・4 年生を対象とした学習指導要領（社会）の内容に即した企画であり、熊本県企画振興部文化企画課博物館プロジェクト班（熊本県松橋収蔵庫）が実施した「ちょっと昔のくらし探検Ⅲ」展の一部を改変した移動展である。展示は県の展覧会担当者と本学学芸員課程履修学生の共同作業とした。

全国各地の歴史博物館で実施されている同種の展覧会は小学校の学習プログラムだけでなく、現代社会が直面している高齢者の認知症対策にも有効であること、それは民俗資料を大量に収蔵している地域博物館の存在意義の向上と民俗資料の文化財的価値の認識にも役立つこと、こうし事柄を広く社会に周知させ、同時に学芸員課程を履修している学生にも理解させることが目的であった。

(3)「私の思い出」（思い出シート）の収集

【目的】思い出が語られる際には必ずといってよいくらいモノがあらわれる。したがって、記憶を収集・分析することで時代を象徴するモノが見えてくるのではないか。こうした仮定のもとに、学芸員課程履修学生の協力を得て「私の思い出」（思い出シート）の収集を行った（2008 年度～2010 年度、今後も継続予定）。

【方法】2008 年度は「思い出のチカラ―回想のススメ―」展と同様に日常生活の中でふとしたことがきっかけとなって思い出したさまざまな事柄をレポートしてもらった。2009 年度以降は文章ではなく、思い出した事柄をフレーズや単語で記述してもらい、それを矢印（⇒）でつないでいくという方式に変更した。

(4) 現代生活におけるモノ情報の収集

【目的】博物館と現代社会、そしてこれからの社会と博物館を考えると、そこに大きな問題が横たわっていることに気づかされる。

それは、

①博物館には高度経済成長期以降の生活にかかわるモノがほとんど収蔵されていないこと。
②収集しようにも収蔵庫が満杯で新たな資料の受け入れが難しいこと。
③どのようなモノを収集すればよいのか、その指針が確立されていないこと。

などである。

①と②は個人の努力で解決できる問題ではないが、少なくとも③に関しては研究者レベルでのアプローチが可能であろう。

したがって、ここでは現代人がどのような道具を使ってどのような生活をしているのか、それを明らかにすることで現代の生活文化資料収集にかかる指針策定の基礎資料たらんことを目的とする。

【方法】現代人がどのような道具を使ってどのような生活をしているのか、それを若者の視点で 50 年後の人々に伝えるというコンセプトを設定し、学芸員課程履修学生の協力を得て、身の回りの道具類の写真撮影及びいつ、どこで、何の目的でその道具を使っているのか等の情報を「50 年後に伝える現代のくらし」シートとしてレポートしてもらった。

(5) アンケート調査の実施

＜アンケート調査①＞

【目的】我々が一定の年齢に達したとき、懐かしいと感じる時代・世代は共通しているのではないか、そしてそれは学齢期から成年期頃迄ではないかと仮定し、それを明らかにするためのアンケート調査を実施した。

【対象】おもに 50 歳以上の世代を対象とした。

【設問】「懐かしいなあ、あの頃はよかったなあ」、「もう一度あの時代に戻りたいなあ」、「苦しいこともあったけど、今となっては懐かしいなあ、いい思い出だなあ」と感じる時代・世代はいつですか？

＜アンケート調査②＞

【目的】「ちょっと昔のくらし探検」展の展示資料は、かつてだれもが当たり前のように使っていた道具類であるが、現在の大学生にとってそれらはどのような対象であるのか、

また現代の暮らしに至るまでの生活様式の変遷理解につながるのか。これらのことを明らかにする目的で行なった。
【対象】学芸員課程履修学生
【設問】「ちょっと昔のくらし探検」展の展示資料について、1 点 1 点の資料名称を記入し、右側の各項目に〇を付けてください。また「ちょっと昔のくらし探検」展の感想を書いてください。
【項目】「初めて見た」「博物館等で見た」「家にあった」「今も家にある」「今も家で使っている」「なんとなく懐かしい」（複数回答可）

４．研究成果

（1）地域博物館における回想法の運営

回想法・回想ワークは厳しい状況に立たされている歴史系の地域博物館に大きな効果をもたらすと考えられ、導入する館も徐々に増えているが、継続的な実施が難しいという声が聞かれる。そのことは、回想法を実践する場として博物館利用を考えている高齢者福祉施設も同様で、やはり大きな動きとはなっていない。その主たる要因は関係者にかかる負担の大きさであった。

博物館が回想法・回想ワークに取り組む場合、博物館の関与のあり方によって、おおよそつぎの 3 タイプに分類できる。

①資料貸出型（資料を高齢者福祉施設等に貸し出すタイプ）
②来館実践型（博物館で博物館スタッフと施設スタッフが実践するタイプ）
③訪問実践型（博物館スタッフが資料を持参して施設を訪問し、施設スタッフとともに実践するタイプ）

ただし実際の運営はもう少し複雑になる。たとえば、活用する資料の選定は博物館及び施設スタッフとの協働作業であるとはいえ、学芸員が貸出可能な資料を提示してその中から施設スタッフが選ぶ場合や、施設スタッフが貸し出しを求めた資料について学芸員が検討することもある。あるいは施設スタッフが収蔵庫の中で資料を見ながら選定するケースも見られる。資料の選定は面倒な作業であるが、博物館及び施設スタッフがともに経験を積み重ねることで、しだいに回想法・回想ワークに適した資料や対象者の生活歴に応じた資料を提示できるようになってくると考える。そうすると、つぎの段階ではすでにいくつかの博物館が試みているキットやパックの作成につながることが予想される。つぎに貸し出しの方法には宅配便の利用もあれば、博物館による移送や施設スタッフが取りに来ることもある。来館実践型では常設展の利用で事足りることもあれば、特別に会場と資料を準備する場合や、その複合型もある。さらに担当者ということでは、博物館側のスタッフとしてボランティアメンバーの参画もあった。継続的に実施している博物館はこうしたいくつかの方法を組み合わせながら実践する例が見られた。

さて、これら 3 つのタイプにはそれぞれ長所と短所がある。資料貸出型は博物館及び施設スタッフの負担が軽いという長所はあるけれども、基本的に博物館側は資料の選定及び貸し出しにともなう事務手続きに関与するだけだから、資料を送り出したあとの安全性を確保できないという短所がある。来館実践型は博物館の負担は軽くなるが、その分施設側の負担が重くなる。いまかりに 10 人の高齢者を博物館に連れて行こうとすれば 4 人程度の引率スタッフが必要で、施設はどこも慢性的な人員不足に悩まされているので、どうしても過度な負担となる。おまけに博物館まで車で 30 分以上もかかるような場合は、参加する高齢者の肉体疲労も考慮しなければならない。一方、訪問実践型は施設側にかかる負担はないけれども、逆に博物館の負担が大きくなり、資料の移動を前提としていることから、選定に制約がともなうといった短所がある（資料の移動による制約は資料貸出型においても同様である）。おそらく、関係者にかかる負担を最小限にするという観点では資料貸出型が適しているということになろうが、資料の確かな保全がはかれないことを博物館がどのように考えるのかという課題は残される。

通常、博物館の収蔵資料は台帳等に登録されている。壊れて展示できなくなった資料は廃棄することもあるが、公の博物館が登録した資料は市民の財産だから、むやみやたらと廃棄したり、不適切な利用によって廃棄対象物を増やすようなことがあってはならない。それは利用ではなく破壊である。高齢者福祉施設等への貸し出しは不適切な利用ではないけれども、安全性が担保できなければ博物館相互の貸借と同様に扱うわけにはいかないだろう。これは博物館機能の根幹にかかわる問題であるから慎重に対処すべきであり、それはなにも高齢者福祉施設への貸し出しにかぎったことではなかった。では、どうするか。便宜的な手法かもしれないが、貸し出すモノを博物館資料から切り離せばよいのではないかと考えている。資料の線引きを行なって、博物館資料といわば貸出用とに分けるのである。その際、新たに入ってきたモノを貸出用に位置づける場合と、すでに収蔵されている資料を貸出用に分離することの 2 通り考えられるが、いずれにせよ線引きには基準が必要である。基準の作成は容易ではないが、現時点では①収蔵庫内で死蔵状態にあり、将来的にも活用の見通しが立たないモノであること、②同種のモノが複数収蔵されており、乱暴な言い方をすれば、たとえ 1 つや 2 つ壊れても博物館活動に支障をきたさない

こと、この2点を分離の基準としたい。さらに回想法での活用を前提とすれば、小型でしかも多くの人に対して豊かな回想を引き出せる可能性を有していること、という条件を加えてもよい。この基準は多くの博物館が回想法・回想ワークと取り組み、事例を収集していく過程で修正を加え、将来的には博物館活動と文化財保護の理念に適う基準を作成すればよいだろう。

回想法･回想ワークは仲の良いグループが自宅やコミュニティハウスで行なうこともある。そうした場合、現時点では個人が博物館から資料を借り出すのはいろいろな制約があって難しい。分離しておけば回想法・回想ワークでの活用のみならず多様なケースに対応でき、それも博物館が地域に存在する意義を明確に示す活動の1つとなるであろう。

(2) 回想法と博物館振興

回想法を博物館振興につなげることについては、第 34 回日本民具学会大会（日程：2009 年 12 月 5 日～6 日、会場：京都造形芸術大学）において「民具を活用した地域博物館における回想法」と題したグループ発表を行い（メンバー及び発表題目：葛西紀行「飛騨の山樵館における回想法の取組」、福西大輔「熊本市立熊本博物館における回想法の取組」、土井孝則「亀岡市文化資料館における回想法の取組」、岩﨑竹彦「民具を活用した地域博物館における回想法―その課題と展望―」発表順)、当該発表が朝日新聞に「日本民具学会でも昨年末の大会で、複数の博物館が事例を発表。『回想法の取り組みは博物館振興につながる』との意見でまとまった」（「脳トレ、懐かし博物館 高齢者元気に、集客も」2009 年 7 月 15 日付）と掲載されたことをもって代表させたい。

(3) 回想法と民具研究

道具の使いみちは、①専ら本来の用途で使用する場合、②本来の用途に副次的な使用法が加わる場合、③本来の用途とはまったく別の用途で使用する場合の3通り考えられる。

民具研究は形あるものを通して形のないものをみる、すなわち有形文化と無形文化の接点を捉え、融合を図ることによって民俗文化を総合的に考察し、日本文化の諸相を明らかにしてきた。その際、祭具や呪具としての民具活用に着目したのは当然のことであるが、信仰要素の伴わない副次的使用法は捨象される傾向にあった。しかし民具研究の進展した今日、信仰面だけでなく、さまざまな角度から民具の副次的使用法を検討すべきであり、そのことがモノと関わって生きてきた我々の生活の在り様を示すことにもなろう。

そしてこれまでの研究において、高齢者の豊かな回想を引き出しうる民具は鍋や釜あるいはザルといった、製作技法や形状の素朴な民具が多いという傾向が見て取れた。それは素朴であるがゆえに、本来の用途に加えて副次的使用にも利用しやすいからであろう。

回想法は民具研究が目的ではないから、民具研究者が予想もしない使用法に出くわすことがある。もちろん民具研究に活用するには、語られた記憶に対して通常の聞き書き、聞き取り調査以上の注意が必要である。とくに認知症高齢者は願望を現実の出来事として語ることがあるので、事実関係が重要とされる事柄に回想法の記憶は適さない。でも道具の使い方ならどうだろう。この道具にはこんな使い方もある、あるいはここをこうするともっと便利に使えるのにというアイディアや工夫を誰かが思い付いたとしよう。そして多くの人が「なるほど」と思い、しかも誰にでも簡単にできることであれば、考え方そのものが重要なアイテムとなる。

こうした視点を今後は民具研究においても取り入れるべきであろう。

(4) 時代を象徴するモノ

収集した「私の思い出」（思い出シート）を分析することで時代を象徴するモノが見えてくる。たとえば、現在 20 歳代の若者であればミニ四駆やゲーム機で友人と遊んだ思い出が多く見られ、これらは時代を象徴するモノとして考えてよいであろう。さらに、これからの博物館資料の有力な候補の1つともなろう。

また、「現代生活におけるモノ情報」はこれまで収集したものを分析すると、つぎのようになる。

モノ	事例数	モノ	事例数
テレビ	17	鍋	4
ゲーム機	15	電気ケトル	3
冷凍冷蔵庫	14	USB ﾌﾗｯｼｭﾒﾓﾘｰ	4
洗濯機	14	加湿器	3
炊飯器	14	CD コンポ	3
パソコン	13	ｵｰﾌﾞﾝﾚﾝｼﾞ	3
電子レンジ	11	MD	3
エアコン	10	メガネ	3
携帯電話	10	電気ｽﾀﾝﾄﾞ	3
掃除機	9	湯たんぽ	3
電話機・Fax	9	ゴミ箱	2
石油ﾌｧﾝﾋｰﾀｰ	8	ﾌﾞﾙｰﾚｲﾚｺｰﾀﾞｰ	2
プリンター	7	カレンダー	2
ガスコンロ	7	イヤホン	2
電気ポット	7	食器乾燥機	2
電灯	6	電気鉛筆削り	2
目覚まし時計		電波時計	2
電子辞書	6	ﾍｱｰｱｲﾛﾝ	2
ドライヤー	6	ｺｰﾋｰﾒｰｶｰ	2
電気ﾋｰﾀｰ	6	ボウル	2
腕時計	6	ｹﾞｰﾑｿﾌﾄ	2
iPod	6	扇風機	2
やかん	5	ｲﾝﾀｰﾎﾝ	2
ｵｰﾌﾞﾝﾄｰｽﾀｰ	5	CD ラジカセ	2

急須	5	和箪笥	2
電気こたつ	5	椅子	2
電気ｱｲﾛﾝ	4	仏壇	2
IH ｸｯｷﾝｸﾞ ﾋｰﾀｰ	4	自転車	2
ポット	4	座イス	2
石油ｽﾄｰﾌﾞ	4	以下、省略	

ここでは紙数の関係で使い方は省略したが、冷蔵庫の扉にいろいろな物を貼り付け、メッセージボードの代わりにしている事例が見られるなど、現代生活における人とモノとの関係が垣間見える資料となりえた。

(5) アンケートの調査結果

＜アンケート調査①＞

予想通り、学齢期から成年期頃迄を懐かしいと感じる人が多かったが、事例数が少ないことから、今後も継続調査を行いたい。

＜アンケート調査②＞

現在の大学生にとって「ちょっと昔のくらし探検」展で展示した資料の大半はおそらくなじみの無い生活道具であるにも関わらず、「なんとなく懐かしい」という意見をよく耳にする。そのことにかねてより疑問を持っていたが、今回のアンケート結果を分析すると、これまで博物館等で見た資料について「なんとなく懐かしい」という気持ちを抱いていることが分かった。これは現在の大学生の多くが小学 3・4 年生の時に同種の展覧会を見学した経験を持っているからであろう。モノに対する懐かしさはこうした学習経験によっても培われるのだということが判明した。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

①岩﨑竹彦、民具を活用した地域博物館における回想法・回想ワーク―その意義と可能性―、民具研究、無、第 142 号、2010 年、pp35-51

②岩﨑竹彦、近現代の生活文化と地域博物館、歴史学と博物館、無、第 6 号、2010 年、pp35-38

〔学会発表〕（計２件）

①岩﨑竹彦、近現代の生活文化と地域博物館、歴史学と博物館のあり方を考える会（平成 22 年度総会）、2011 年 2 月 26 日、大阪市総合学習センター

②岩﨑竹彦、民具を活用した地域博物館における回想法―その課題と展望―、日本民具学会第 34 回大会、2009 年 12 月 6 日、京都造形芸術大学

〔その他〕

いくつかの展覧会を開催しているが、研究方法の項目に詳述したので省略する。

６．研究組織

(1)研究代表者

岩﨑　竹彦（IWASAKI　TAKEHIKO）
熊本大学・五高記念館・准教授
研究者番号：８０３００４０８